

笑顔戻る日まで

国際医療ボランティア・AMD A（本部・岡山市北区伊福町）の調整員大政朋子さん(40)は東日本大震災の発生直後から2年間、三陸沿岸部で医療サービスや高齢者のケア、被災地の魅力を伝えるイ

ベント企画などに携わってきた。宮城県石巻市に仮住まいしながら東奔西走。「みんなが安心して暮らせる日まで」。その思いを胸に被災者支援に心を砕く。

(平田桂三)



鍼灸の治療中に仮設住宅の住民に声を掛ける大政さん。被災者が安心できるように支援を続けるつもりだ。宮城県石巻市雄勝町

太平洋に面した石巻市雄勝町名振地区。入り組んだ海岸から約300メートル離れた高台にある名振第1仮設住宅では14世帯が暮らしている。その一角にある「コミュニティハウス」。毎週木曜日、AMD Aが行う鍼灸の訪問診療を高齢者らが受けている。「楽になったよ」。ベッドから起きた女性(70)が膝をさすりながら息をつくと、「よかった、来週も」

「来てね」と、診療を手伝っていた大政さん。ペッドを整える手を休め、「被災地で2年を過ごすなんて、想像もなかった」と、あの日を思い起こした。きっかけは1通のメール。「何かできることとありませんか」。震災当日の2011年3月11日、ボランティアで関わっていたAMD Aに送った。当時は岡山大で国際法を学ぶ

予想外の展開に戸惑いつつも仙台市へ急行した。医療チームの受け入れや物資調達に寝る間もなく追われ、4日後に戻った岡山で思った。「何もできなかった。もう一度行かなければ」。戸惑いは決

「私を必要とする人も」

4月、AMD Aの正職員になって再び被災地へ。若手県大槌町では避難所を巡りながらボランティアを配置し、健康支援施設を開いた。宮城県南三陸町では休むことなく診療を続ける開業医の疲れを知り、交替の医療スタッフを手配。岡山と被災地の中高生を結びスポーツ・文化交流も実現させた。支援を



復興グルメ大会が開かれ、にぎわう復興商店街南町紫市場＝1月20日、宮城県気仙沼市

「現場からの発信が必要だ」。そんな思いに駆られる中、相互訪問などで交流を始めていた岩手、宮城県の仮設商店街に目を付けて、折しも「当地グルメの「B-1グランプリ」が話題となっていた。東北は食材豊かだ。「これだ!」とばかりに六つの商店街が自慢の一品を持ち寄る復興グルメ大会を企画した。今年1月、宮城県気仙沼市の復興商店街南町紫市場で開催すると、予想を超える1500人が来場。大きな手応えを感じた。

瞬間に過ぎた2年間。7月末には滞在期限を迎える。鍼灸診療は現地スタッフに任せられるようになった。4月の第2回グルメ大会は商店街が主導する。でも、医師や看護師も被災者という雄勝町の医療サービスはまだ十分ではなく、長期にわたる避難生活に高齢者はストレスを募らせている。やれることはまだありそうだ。

最近、大政さんは覚悟を固めた。「私を必要とってくれる人もいます。そんな人たちのため最後まで頑張りた。みんなに笑顔が戻り、『もう大丈夫だよ』って言われる日まで」

意)に変わった。4月、AMD Aの正職員になって再び被災地へ。若手県大槌町では避難所を巡りながらボランティアを配置し、健康支援施設を開いた。宮城県南三陸町では休むことなく診療を続ける開業医の疲れを知り、交替の医療スタッフを手配。岡山と被災地の中高生を結びスポーツ・文化交流も実現させた。支援を

通じ、寄り添いすぎない適度な距離感が被災者の「自立の芽」をはぐくむことも知った。ただ、1年が過ぎるころ、風化の「おいて」を感じた。避難所は消え、被災者は仮設住宅へ移住。がれきは撤去され道路も復旧した。見た目に落ち着いたと思われたのか、ボランティアは来なくなり、東北以外で被災地報道が減ったと聞いた。